

顕彰状

三木卓氏（本名富田三樹）は、1935年5月13日に東京市淀橋区淀橋に生れた。幼少の頃、詩を書いていた父や家族と連れ立って中国大陸に渡るが、小児マヒを患い、さらに父の病死にあい、引揚げ時には祖母も失った。こうした戦時中の苦しい体験は、氏の文学の原点として、その後繰り返し反芻されることとなる。静岡で高校を終え、1955年早稲田大学第一文学部文学科露文学専修に入学、先輩五木寛之らと同人誌「文学組織」で活動、かたわら詩作を開始して若い詩人たちと交友した。

氏は1959年に早稲田大学を卒業後、一時大学院に籍をおいたが、「日本読書新聞」や河出書房新社などで長く編集者として働き、そのかたわら詩や評論を書き続けた。堀川正美・高良留美子ら実力ある若手のグループの雑誌「氾」^{はん}「詩組織」に参加、1966年、31歳の時、第一詩集『東京午前三時』を思潮社から刊行、翌年詩壇の登竜門であるH氏賞を受けた。童話の創作・翻訳を始めたのも、この頃の事である。

1970年に第二詩集『わがキディ・ランド』を刊行し、第1回高見順賞を受けてから、戦中の満州体験、戦後の引揚げ体験に根ざす小説を書き始め、1973年、雑誌「すばる」に発表した短篇『鷓鴣』^{ひわ}で第69回芥川賞を受賞、受賞作を含む短編集『砲撃のあとで』は、少年の眼を通して人間の原点を描き、多くの読者を得た。その後も戦争体験に関わるモチーフを追求し続け、『震える舌』（1975年）『かれらが走りぬけた日』（1978年）『野いばらの衣』（1979年）を始めとする多くの作品を発表した。1994年心筋梗塞の発作に見舞われるが無事に退院、その後氏ならではの観察眼に根差した文学世界は深まり、鎌倉を舞台にした連作短篇集『路地』（1997年）、静岡での若き日を描く『裸足と貝殻』（1999年）などで作家としての力量を発揮したほか、評伝『北原白秋』（2005年）を完成した。

氏は、H氏賞・高見順賞・芥川賞に続き、1989年に芸術選奨文部大臣賞、1997年に谷崎潤一郎賞、2000年に読売文学賞、2006年に毎日芸術賞・日本芸術院賞恩賜賞など多くの賞を受けた。また2007年には、日本芸術院会員にも選ばれている。

三木卓氏は、稲門出身文学者として常に戦後の詩壇・文壇に重い位置を占め、詩・小説・童話・翻訳・評論と諸分野で多彩な活動を続けている。早稲田大学の文学伝統を継承するとともに、日本の現代文学に独自の重量感ある文学世界を形成してきた氏の功績は、本学の誇りである。ここに早稲田大学は、三木卓氏の功績をたたえ、早稲田大学芸術功労者として永くその栄誉を顕彰するものである。

2009年4月1日

早稲田大学